東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2005年7月29日

信仰の恵み

ムスリムの皆様。信仰とは、辞書でひくと、「疑いを抱かず、心から信じること、心の安らぎと共に受け入れること」というような意味になります。用語としては、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がアッラーからもたらされた物事、確定的なこととして認識され、知らせとして伝えられた物事を、心から認めることを意味します。

親愛なるムスリムの皆様。人間は、信仰の光によって、完全な人、という段階に到達することができます。信仰は人を、創造主に結び付けます。それによって、人ははかなく、刹那的な存在であることから救われます。単なる物質的な存在ではなく、全ての存在が彼ら自身のために創造され、アッラーが被造物をその役に立つようにと備えてくださった存在であり、またアッラーのこの地上での代理人、創造主を示す最大の論拠となります。信仰が心に入った時、まず人の、そしてそれ以外の被造物の上で、アッラーの光を覆い遮っていた闇が消え去ります。万物の上にアッラーの光が現れ、「アッラーは天地の光である。」という章句の神秘が顕示されます。

ムスリムの皆様。人の心が信仰の光によって輝かされなかった場合、その周囲を無限の闇が覆います。地も、天も、意味がなく、そこで起こる出来事も、何の意図もなく、真実が目にされることもなく、心はさまざまな種類の苦しみの中でもがき続けます。

信仰の光が心に入った時には、人は最初に自らを無意味であること、目的がないことから救い、同様に周囲の被造物で起こる出来事も　また、意味を持つものとなるのです。全てがアッラーの英知、ご意志によって起こるということを知り、アッラーを私たちに知らしめ、その御名と特性を顕示するアッラーの章句となり、人を創造主へと至らせる道案内となります。全ての被造物は、それぞれの固有の言葉で、その創造主を解き明かす書物のようになるのです。

雌牛章第２５７節では、「アッラーは信仰する者の守護者で、暗黒の深みから、かれらを光明の中に導かれる。信仰しない者は、邪神（ターグート）がその守護者で、かれらを光明から暗黒の深みに導く。」と説かれています。ここで説かれている信仰の光によって、人の過去は光を得て、どこから来たのか、父祖が誰であるのかという問いの答えを見出すのです。このようにして、過去は、死者たちが無となり去っていった巨大な墓場ではなく、アッラーの使徒たちと、彼らに従う信者たちがアッラーを想念する集まりとなります。同様に、信仰は、人が存在するその時間にも、光をもたらします。周囲の物は、勝手気ままで適当なおもちゃではなくなり、持ち主を讃えるものとなります。これによって、自らの上に、そして被造物たちの上にアッラーの美名、その無限の知、力、そして慈悲の持ち主であられることを見出します。それで自らの無力さを理解し、アッラーの偉大さに対し、サジュダを行ないます。自らに与えられた生命がどれほど大きな恵みであるかを把握します。こうして、肉体的、精神的能力を発展させ、天国へ行くのにふさわしい状態となるのです。

親愛なるムスリムの皆様。信仰の光によって、未来もまた、暗闇から光の中へと移ります。この世界での生の後、人は無に帰すのではなく、またどうなるのかわからない運命でわなく、墓は終わりのない幸福、天国へと人を到達させる回廊となります。

そう、これらの全ての闇、苦痛、不明確さを取り除くのが、信仰の光なのです。だからこそ、章句では、「闇」は複数形で、「光」は単数形で用いられていると学者達が説くのです。

親愛なるムスリムの皆様。人は、信仰の光のおかげでまず自らを理解し、全ての存在はアッラーを示している印として認識し、理解し、それによって被造物を愛します。そして、この世界においても、天国のような生を送るのです。